

自分とのかかわりで考え、自己の生き方について考える道徳科の授業

～道徳的行為に関する体験的な学習をとおして～

田中 千映

子どもたちが道徳科の授業の中で、道徳的価値を自分とのかかわりで考えることができれば、自己の生き方についての考えを深めることができると考える。そのための工夫として、道徳的行為に関する体験的な学習を効果的に取り入れる授業展開を考えた。家族からの手紙をもらうという道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れた「ハムスターの赤ちゃん」、友達から自分の長所を言ってもらおうといった道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れた「ぼくのこと きみのこと」の2つの授業について実践を行い、考察を行った。どちらも、子ども自身が道徳的価値を実感することができ、自分とのかかわりで考えることができた。また、自分とのかかわりで考えることができたことで、振り返りにおいても、自分事としての振り返りができた。道徳的行為に関する体験的な学習をねらいに応じて取り入れることは、自己の生き方についても考えを深めやすいということがいえる。

キーワード：自分とのかかわり、自己の生き方、道徳的行為に関する体験的な学習、ハムスターの赤ちゃん、ぼくのこと きみのこと

1. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

- ①子どもたちが自分とのかかわりで考え、自己の生き方について考える道徳の授業を探る。
 - ②道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れることによる効果的な授業の在り方を探る。

1. 1. 学校提案より

学校提案「未来に生きて働く資質・能力の育成」を受け、本校道徳部では、育みたい資質・能力である「探究力」と「省察性」を以下のように設定した。

「探究力」

他教科・他領域、日常生活などの体験とつなげて考えたり、自分と友達の感じ方や考え方を比べたりしながら多面的・多角的に自己のよりよい生き方について追究する資質・能力。

「省察性」

道徳的価値理解について自分とのかかわりで問い直し、自己のよりよい生き方について考えを深める資質・能力。

「探究力」と「省察性」を育むためには、自分とのかかわりで考え、自己の生き方について考える道徳の授業を行うことが重要であると考え。

1. 2. 自分とのかかわりで考え、自己の生き方について考えを深める

道徳科の授業の指導方法については、「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」（2014）で、これまで読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があることや、発達の段階

などを十分に踏まえ、児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業になっている例があることなどの多くの課題あることが指摘され、道徳的な課題を一人一人が自分自身の問題と捉え、向き合う授業へと質的転換していくことが示されている。

赤堀（2018）は、次のように述べている。

- ・道徳授業で最も大切なことは、児童が道徳的価値を自分とのかかわりで考えられるようにすることであり、人間としてよりよく生きる上で大切な道徳的価値を観念的に理解するのではなく、自分事として考えたり感じたりすることが重要である。
- ・児童が道徳的価値の理解を自分とのかかわりで図り、自己を見つめるなどの道徳的価値の自覚を深める学習を行っていれば、その過程で同時に自己の生き方についての考えを深めていることにつながる。

つまり、子どもたちが道徳科の授業の中で、道徳的価値を自分とのかかわりで考えることができれば、自己の生き方についての考えを深めることができると考える。

1. 3. 道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れる工夫

「学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」に、「児童の発達の段階や特性などを考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること。」が明記されている。

赤堀（2018）もまた低学年における多様な授業展開の一つに道徳的行為に関する体験的な学習を挙げ、体験や活動を通じて、道徳的価値を実現することのよさ

や難しさを考えられるようにすることが重要であると述べている。

これらのことから、子ども自身が道徳的価値のよさを実感するために、指導のねらいに即し、道徳的行為に関する体験的活動を効果的に取り入れる授業展開を考えたことで、道徳科の授業において、子どもたちは自己の生き方について考えを深めることができると考える。

2. 研究仮説

道徳科の授業において、指導のねらいに即し、道徳的行為に関する体験的活動を効果的に取り入れることによって、子ども自身が道徳的価値を自分事として実感することができ、自己の生き方について考えを深めることができるであろう。

3. 研究内容・方法

道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れると効果的であろうと考える教材を選び、道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れた学習展開を行う。

授業中の子どもの発言や振り返り記述から、自分とのかかわりで考え、自己の生き方について考えることができたかを分析する。

3. 1. 家族から手紙をもらう

教材「ハムスターの赤ちゃん」(1年)

ねらい

生きることの素晴らしさや自分を大切に育ててくれた家族の思いに気づき、生命を大切にしようとする心情を育てる。

生まれたばかりの赤ちゃん、お母さんの口にくわえられている赤ちゃん、生まれて十日たった赤ちゃん、これからどんどん大きくなる赤ちゃんが描かれている。一生懸命に生きるハムスターの赤ちゃんの姿から生きることのすばらしさや生命を大切にしようと考えさせられる教材である。しかし、ハムスターの赤ちゃんから自分への繋がりが難しい教材である。自分とのかかわりで道徳的価値を理解させるためには、自分が大切な存在であり、大事に思っていることが書かれてある家族からの手紙をもらうという道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れる必要があると考えた。

3. 2. 自分のよいところを友達に教えてもらう

教材「ぼくのこと きみのこと」(1年)

ねらい

一人一人に長所があることや自分の長所に気づき、自分のよさに目を向けようとする心情を育てる。

主人公の「りく」は、自分や友達の良いところを知ってい

て、教材の中で「ねえ、きみのよいところもおしえて。」と投げかける。主人公「りく」の言葉から、自分の長所について考えさせたいと考えた。しかし、子どもたちは自分自身を客観視することが十分できるとは言えないため、友達から自分の長所を言ってもらおうといった道徳的行為に関する体験的な学習活動を取り入れることで、自分の長所に目を向けることの意味や価値を考えさせることができると考えた。

4. 授業の実際とその考察

4. 1. 「ハムスターの赤ちゃん」

授業の前半では、赤ちゃんが生まれたばかりのお母さんハムスターの気持ちと、十日たって赤ちゃんが大きくなったときのお母さんハムスターの気持ちを考え、話し合った。

その際、以下のような意見が出された。(図1)

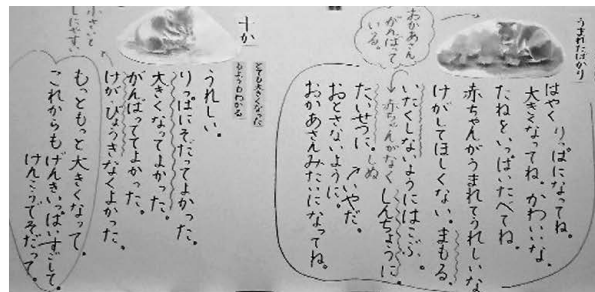


図1 「ハムスターの赤ちゃん」の話し合いの板書

ハムスターのお母さんの気持ちの話し合った後、「お家の人はみんなのことをどんなに思っているのかな」と子どもたちに投げかけた。

子どもたちの反応は「ハムスターのお母さんと同じ気持ちかな」「大事と思っているかな」などであり、自信をもって同じとは言えない様子が見られた。

そこで、事前に用意してもらっていたお家の人からの手紙を子どもたち一人一人に手渡した。

子どもたちの反応は、以下のようなものである。

- ・めっちゃ嬉しい。
- ・嬉しくて泣きそう
- ・ありがとうって思った。
- ・こんな気持ちで育ててくれたんだってわかった。
- ・ぼくの手紙にも、ハムスターの赤ちゃんに出てきた宝物と同じ言葉が書いてあったよ。
- ・お返事書きたい。



図2 おうちの人からの手紙を読む子どもたち

子どもたちから返事を書きたいとの声があがったため、振り返りのワークシートの記入は行わず、お家の人に手紙を書くことを行った。

手紙には以下のような記述が見られた。

◇おかあさん、おとうさんへ
いつもありがとう。お手紙ありがとう。いつもごはんを作ってくれてありがとう。いつも頑張ってくれてありがとう。

◇おかあさんへ
まえ、ぼくをうんでくれてありがとう。これだけ大きくなったのもおかあさんのおかげだよ。これから**もぼくのことを育ててね。**

◇ママへ
ママ、小さいときから大せつにそだててくれてありがとう。いつも大せつにしてくれたりして、とてもうれしいです。ありがとう。

◇ママへ
ママ、お手紙ありがとう。いつもおいしいごはんを作ってくれてうれしいよ。〇〇も、ママや家族のみんなが大すきだよ。どんどん大きくなるよ。

◇おかあさん・おとうさんへ
おかあさん・おとうさん、お手がみありがとう。〇〇も、みんなのことずうっとずうっと大すきだからね。これからいろんなことがあるとおもうけれど、なんでもがんばるからね。

お家の人からの手紙を読む子どもたちの様子(図2)や、手紙を読んだ子どもたちの反応を見ると、お家の人もハムスターの赤ちゃんのお母さんと同じように、自分のことを大切に思い育ててくれたということを実感することができたように思う。また、「ぼくの手紙にも、ハムスターの赤ちゃんに出てきた宝物と同じ言葉が書いてあった」という言葉からも、ハムスターの赤ちゃんも自分も同じように大切にされているということが手紙を通して重ね合わさったと考える。

また、子どもたちは、手紙をもらう前は「大切に思ってくれているのかな」と大切に育ててもらっていることは感じつつあるものの確信がもてなかった様子が伺える。しかし、子どもたちがお家の人に書いた手紙の言葉(下線部)からは、自分が大切にされていることを実感することができたことが読み取れる。また、手紙の言葉(下線部)は、お家の人のおいを受け、これから自分を大切に頑張っていこうという思いにつながったと考える。

4. 2. 「ぼくのこと きみのこと」

教材「ぼくのこと きみのこと」を読み、主人公の「りく」をはじめ、「たくま」「ゆうこ」のそれぞれのよいところや苦手なところをみんなで話し合い確かめた後、自分のよいところを各自ワークシートに記入した。一人だけ「自分のよいところはわからない」と、

自分のよいところを書くことができなかった。

その後、友達に自分のよいところを友達に聞きに行くという活動を行った。(図3)



図3 友達に自分のよいところを聞く子どもの様子

友達に自分のよいところを聞いた後、どんなことを思ったかについて話し合った。

以下は、その授業記録の一部である。

教 師：自分のいいところを教えてもらってどう思ったか教えてください。

なおた：みんなぼくのよいところを知っているんやなつて。

きさら：みんなが私のことをこんなこと思っていたの言ってもらったし、嬉しかったです。

教 師：みんながこんないいことを思ってくれているってこと？

きさら：うん。嬉しいよつてね。

ゆうじ：みんなに言ってもらったことを続けたほうがいいと思った。

教 師：どうしてそう思ったのかな？

ゆうじ：ぼくはいいことが一個しかなかったから、続けないといいとこがなくなってしまう。

れ お：自分のよいところをもっと増やしたいと思いました。

教 師：どうしてそう思ったの？

れ お：もっと増やしたら、ありがとうとかお母さんに言ってもらえるから、だからもっと増やしたい。

せいな：こんなところが自分がいいんやなつて思った。ちょっと意外だった。

あかね：こんなにいいところあったんやつてわかつた。

授業の終末では、学習を振り返り、思ったこと考えたことワークシートに記述した。

以下は振り返りの記述である。

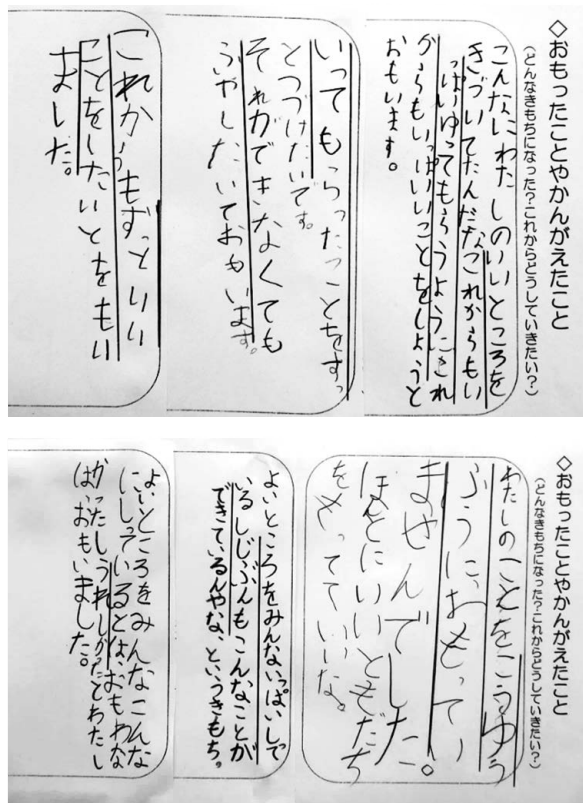


図4 子どもたちの振り返りの記述

授業中のきさら・せいな・あかねの発言からも、自分のよいところを友達に言ってもらい、自分のよさに目をむける心地よさを実感できたことが感じ取れる。同時にこれまで意識していなかった自分のよさにも気付くことができたと考え。ゆうじや、れおは、「言ってもらったことを続けたい」や「もっと増やしたい」と発言している。ゆうじは、その理由に「1 個しかないから続けられない」といいところがなくなってしまったから」という否定的な発言をしているが、友達に言ってもらったからこそ、その自分のよさを大事にしていきたいと思えたのではないかと考える。また、れおの増やしたい理由としては「ありがとうとかお母さんに言ってもらえるから」と発言している。生活科「えがお大作戦」の授業で、お手伝いをして、お家の人から「ありがとう」や「すごい」の言葉を掛けてもらってきている。友達によさを言ってもらって、自分のよさを友達から認めてもらった喜びと、お家の人から自分の頑張りを認めてもらった喜びとが重なり、「もっとふやしたい」という思いをもつことができたのではないかと考える。

振り返りの記述(図4)からも、友達によいところを言ってもらった時の心地よさや、よいところに目を向けることの心地よさを感じることができたことが読み取れる。また、「これからもっとその良さを伸ばしたい」「増やしたい」などの記述は、よいところを友達に言ってもらい、その心地よさを感じることができたか

らこそ、それらの思いにつながったのだと考える。

友達に自分のよさを教えてもらうという道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れたことで、子ども自身が道徳的価値のよさを実感することができ、自分のよさに目を向けることの意味や価値を再認識することができたと考える。

このことから、友だちに自分のよさを教えてもらうという道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れたことは、自分とのかかわりで考え、自己の生き方について考えることに効果的であったと考える。

5. 成果と課題

「道徳科の授業において、指導のねらいに即し、道徳的行為に関する体験的な学習を効果的に取り入れることによって、子ども自身が道徳的価値を自分事として実感することができ、自己の生き方について考えを深めることができるであろう」という研究仮説のもと、2つの授業「ハムスターの赤ちゃん」「ぼくのこと きみのこと」の実践に取り組んだ。

2つの授業の考察からも、道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れる工夫は、子ども自身が道徳的価値を実感することができ、自分とのかかわりで考えることができたといえる。また、自分とのかかわりで考えることができたことで、振り返りにおいても、自分事としての振り返りができた。つまり、道徳的行為に関する体験的な学習をねらいに応じて取り入れることは、自己の生き方についても考えを深めやすいといえる。

しかし、道徳的行為に関する体験的な学習の中には、本研究で扱ったような体験的な学習以外にも、劇化・動作化・役割演技等を取り入れた学習も含まれる。今後は、それらを取り入れる学習の工夫についても研究を行い、子どもたちが自分とのかかわりで考え、自己の生き方について考える道徳の授業を探っていきたい。

参考文献

文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」, 廣済堂あかつき株式会社
赤堀博行(2018)「道徳科授業の新展開 低学年」, 東洋館出版社